

平成29年度国立大雪青少年交流の家施設業務運営委員会第2回事業部会議事要旨

日時：平成29年11月16日(木) 14:30～16:00

場所：国立大雪青少年交流の家 音楽談話室

運営委員出席者：大島部会長，尾中委員（佐藤委員代理），村上委員，
栗原委員（浜田委員代理）、三浦委員（飯塚委員代理），

計5名

欠席者：目黒委員，石田委員

計2名

大雪青少年交流の家（事務局）

出席者：中田次長，村澤企画指導専門職，是安企画指導専門職，国枝企画指導専門職
安達企画指導専門職、石川企画指導専門職付

計6名

【●事務局 ○部会長 □委員(長)】

●開会宣言

会議時間・資料確認，委員の確認，新職員の自己紹介。
以下部会長による進行

【議題1・2について】

○部会長

「事業計画及び進捗状況について」、成果報告を1事業ずつ説明してほしい。

●事務局

- ・「たびうさぎ」は、今年度からスタートした年間登録制の事業。これまで8回実施。
- ・このあとは、1月と2月に実施に向けて計画中。
- ・現在の登録者は87家族。ほとんどが旭川からの登録で59家族。その他は東川、東神楽、美瑛、富良野、中富良野、上富良野、札幌からも登録がある状況。
- ・事業のプログラムデザインのポイントとしては、調理活動を入れていること、親子で活動を行うということ、親の気持ちに火をつける活動ということも大切なのではないかと、これらのポイントをおさえて事業のプログラムデザインを行っている

る。

- ・1回目の6月は、親子でのスポーツチャレンジと調理ではピザ作り、7月は親子でキャンプをし、ここではカレー作り、9月は望岳台から白銀荘分岐までの軽登山を2歳児も行った。調理活動は焼き芋を食べた。
- ・11月は「食と運動」というテーマで、「たびうさギネス」という様々な競技に親子でチャレンジをして記録を残した。これは、機構がプログラム開発をしている「36の基本的な動き」を取り入れて実施した。ここでの調理活動は、豚汁、おにぎり、鮭のチャンチャン焼きを行った。
- ・今までの成果としては、4回目である11月の事業では14家族のうち12家族がリピーター。過去全てに参加しているのは、そのうち3家族で、リピーターが回を重ねるごとに増えている。
- ・リピーターが増えていくことによって、例えば後片付けを参加者全員で声をかけながら行うなど、最初は見られなかった様子が見られるようになった。これまでになかった仲間意識や一体感などが芽生えてきているのではないかと見ている。
- ・保護者からは、「非日常体験だからこそ見られる子供の様子ということがあるので、年間をとおして参加をしていきたい」などの声が聞かれ、大変好評な事業である。今後、これらのことを踏まえて計画を進めてきたい。

○部会長

資料1-2の表を見ると、事業の進捗状況がわかる。この中で「特別受入週間」となっているものは何か。

●事務局

- ・キャンプ事業は機材の関係で、一度に全員を受け入れできないため、期間中に4日ほど日程を設定して、3家族程度でキャンプを行った。たびうさぎの事業としては内容では6回分だが、2回目のキャンプを4日行っているため、全部で10回としている。
- ・テントが足りないため、当初、キャンプの時は人数を制限した。しかし、来たい方のために、追加で4回のキャンプを行った。

□委員

登録制とあるが、年度途中で入りたいという家族がいた場合は、どう対応しているのか。

●事務局

- ・年間をとおして、常に募集をしている。事業に参加した場合は、会員になって申込をしてもらっている。今現在も、会員を募集中としている。
- ・年度当初は50ぐらいの家族数だったが、その後徐々に増えて、今は87。

- ・今後も幼児教育フォーラムなどを行うことや口コミなどで、会員数が増える可能性があると考えている。

□委員

単年度会員ではないのか。

- これは永久会員制。退会する時は申し出ていただき、それまでは「たびうさぎ」の事業や、幼児向けの事業については、随時情報を流していくツールとして活用していく。「ゆーすフェスタ」などでも、「たびうさぎ」から情報を得て、実際に泊まる家族も出てきている。
- 補足だが、去年の第3回のこの会議段階での計画では、親子の利用拡大のための事業という位置付けで始めたが、機構が幼児教育に力を入れようという方針に変わったことを受けて、相当に路線を変更して、親子での体験活動が親子の絆作りにどのようないい影響を及ぼすのかなど、毎回保護者にアンケートを取っている。その中で、親子で一緒に食べる活動が、毎回満足度が高いので、多分そのような体験活動が親子にはいいのだろうとか、充足率の話になるが、1回目に97名を受け入れしたが、人数が多すぎて対応がうまくできなかった。色々と試行錯誤しながら行っているが、プログラムも基本的には集まったその日のうちに1本、次の日は帰る前に1本、夜はゆったりと過ごしてもらおうというのが、親子には良さそうだという成果が見えつつあるという状況。まだ、この事業については報告書というかたちになっていないので、3月時点では、もっと整理した形で、アンケート調査の結果なども含めて、御報告ができると考えている。これから、冬の事業になるが、アイデアが少なくなってきたので、親子で、特に小さい子でもできる作業がないか考えている。

○部会長

1/13~14は何か他の事業と抱き合わせだったか。単独の事業だったか。

●事務局

11月の「たびうさぎ」の事業は、ボランティアを学びに来ている方々の演習の場所として実施。1月もボランティアの自主的な取組として考えていたが、ボランティアの状況や担当者側でも色々と試行してみたいところなどもあるので、今のところは抱き合わせにはしない方向で考えおり、未確定である。

○部会長

一つの方法として、「餅つき」はいいのではないか。自分の保育園では、つくのは大変なのでミニ臼で行い、あとは機械でついたものを、自分で丸めて、砂糖醤油などにつけて

食べるということをしている。幼児がつくのは大変だが、親子事業なら可能であり、そういうことも体験としてはよいのではないか。

●事務局

美瑛ならではのものは、何かないか。例えば、農協の女性部から何か教えてもらおう等。

□委員

街中では、それなりの活動をしている方も多いが、その部分だけで活動をするわけではないので、ここでは今のような形でやるしかないのではないか。

●事務局

餅つきは、こちらでも考えたが、ノロウィルスのが気になる。餅つきをやらないうところがだんだん増えている。餅つき機だけならよいのかもしれないが、冬場は風邪やその他のウィルス性のものが流行る時期なので、実施する価値はあると思うが、どうしても菌が持ち込まれるということがあるので、敬遠しているところが多い。

○部会長

事業のコンセプトにも関わるが、食べ物作りは、業者以外の者が対策を意識して行うというのは、なかなか難しい。

●事務局

森林管理署の方がいらっしゃるので、例えば、2～3月に白樺の樹液を採取することなどはできないか。メイプルシロップ作りを体験としてできないか。そのように、家庭などではなかなかできないようなことが、できないか。そういったことをうまく指導できる方が地域にいらっしゃれば、ぜひ御紹介いただきたい。

○部会長

穴を開けて、パイプを通してなど、時間が必要だろう。仕掛けておいて、翌日どうなっているかなど。

●事務局

われわれも勉強をしないとならない。

□委員

木に穴を開けるということは、問題はないのか。個人の木でなければ、咎められるだろう

う。

○部会長

自分も中頓別で、樹液取りをしたことがあるので、可能。ただ、犯罪にならないように、勉強は必要。

□委員

私は大工で、木の話が出たので。余市から来たちょっと背中を押してあげるような子供たちが青年の家に来て、自分の会社で受け入れをして、物づくりをさせたことがある。何年か続いた。青年の家から担当も来た。経験のない子たちばかりなので、大工の仕事で単調な仕事であれば、子供でも面白がってやるので、危険がないように建前の日に平らな屋根をはる作業などをやらせた。あとは、美瑛東小から頼まれて、5・6年生のところを1週間通って、毎日1時間半指導に行った。自分の課題を作って、そこに向かってやるということをして、子供は喜んでいました。

○部会長

親子で、物づくりの体験をするというように、危険を避ける意味では、食べ物に特化しなくてもよいのではないかと。今は、事業をやりながら発しているところもあるで、年度末には「次年度はこれでいこう」というものが作られればいいのではないかと。

●事務局

物づくりは、親子の事業ではなく、小学生の事業でやりたいという話もある。職員の中では、家などが作れば、すごくいいだろうと話しているので、改めて委員に相談に伺いたい。

□委員

何回か相談されて、何年前かに「バードテーブル」などを、ここで作ったことがある。

○部会長

それでは次に、「登山指導者研修会」について、お願いします。

●事務局

今までも事業を行ってきたが、これは何の登山なのか、どの指導者を指すのかがはっきりしなかった。今年度は、「安全な登山をすること」を大前提として、しっかり行い、その上で「青少年の集団登山」、例えば学校など子供たちが集団で登る時に、どのような効果があるかを指導者がしっかりと押えた上で登山を行っていく指導者を養成するという

ことで実施。報告書の3ページにある「集団登山の教育的意義」を来られた方に、再度押えていただくことをねらいとして行った。例えば、登山では個々の体力向上という部分があり、集団登山では仲間との支え合い、自然に触れながら集団を育てること、学術的なものでは火山の知識が得られることなども、登山には教育的価値があると言えると思う。これら3つの教育的価値を登山に行くときには掘り下げて考えてみてはいかがかと提案している。例えば、十勝岳に登山する場合は、事前に歴史や火山について教えておき、実際の登山の中で気付きを引き出すというように、指導者の準備や登らせ方で、教育的効果に違いが出るということについて、指導者に考えてもらうのが30分。それ以外の時間は、青少年の登山は安全が基本なので、それに特化した流れになっているが、それらのことについてもう一度、考えてもらうようにした。実際に、参加の方も今年は高校の登山部と連携をして、周知について御協力をいただき、山岳部の指導経験のあまりない指導者も参加していただいた。参加実績は募集20名に対して、実際に山に登ったのは27名だったが、中標津の小学校からの「時間の関係で登山には出られないが、講義を聴きたい」という方を合わせると29名の参加で実施した。学校の先生が多い参加となっていることも、青少年の集団登山というかたちに特化して実施した効果ではないかと考えている。参加者の声では、「ただ登山をただだけでなく、指導者がそこで得られる学びを整理して、子供の気づきを促していくことが大切」というふうに、この事業のねらいとしていたことを、参加者の方からも納得したという声が出たり、仲間との関わりの中で個人の成長の面でも登山の教育的な価値を実感されたりしていた。これらのことが、大雪の登山の利用団体にどれだけ反映されているか未知数の部分はあるが、実際に指導者、学校の教員に登山の大切さを訴えていくことが、今後は少しずつ、利用につながっていくのではないかと考えている。ただ、登山については明らかにリスクが大きい活動になるので、学校としては敬遠しがちな部分もあり、今後については、実際に登山で利用している団体の指導者への聞き取りなど、登山についての有用性を周知できるように事業をまとめていきたい。

○部会長

例えば、学校の利用団体で登山をプログラムに入れている団体はどのくらいあるのか。

●事務局

実は、あまり多くはない。小学校は望岳台までなど、恐らく8割以上がハイキング活動を行っている。高校の方は、4～5月に来るのでフィールド的にその時期は登山ができない。高校の方は主に学級づくりなどで、高1クライシスなどを軽減することが目的としているので、あまり多くない。美瑛高校は登っている。高校は少ないかもしれないが、小中学校のハイキングは、かなり行っている。

●事務局

平成 22 年で山を使う活動を行っているのが 70 校ぐらいだったのが、昨年で 40 校ぐらいと半分ぐらいに減っている実態がある。調べていくと、危険だという印象が強いのと、先生方自身も登山をしたことがないという先生が多い。あとは安心して指導を頼める指導者がいれば、考えないわけではないが実際にそのような指導者が地元にはいない状況。山岳会ではガイドができる人材がひじょうに高齢化して、若い世代も育っていない。今は登山ブームで色々な方が行すが、どちらかというと生涯学習で、自分の趣味で好きに登る方はたくさんいるが、誰かを責任もってガイドする人は不足しているという実態がある。

○部会長

なるほど。ところで、「集団登山」という響きはいい。普通、「登山指導者研修会」というと、登山をする専門家を養成するというイメージだが、集団登山というと学校だな、大雪で集団登山というイメージになる。それであれば、ネーミングも「集団登山指導者研修会」でもよいのかもしれない。利用指導者研修会と集団登山指導者研修会との兼ね合いもあるので、思い切って、集団登山という「学校が山を使用するための指導者の研修会」ということを明確に打ち出していくのも一つの方法ではないかという気もする。

□委員

この企画の参加者には、経験のある方が付いていかれたのだろう。昔は、当たり前のように学校で登山に行った。その時は、案内役のような専門の人が付いて、例えば白銀荘にはそのような山の専門の人が必ずおられたので、その人たちが町の学校まで下りてきて一緒に付いて案内してくれた。今回の企画については、事務局の説明にあったような人がいればいい。学校の先生はすごく危険なことに度胸がなくなっている。食べ物でも何でも。例えば電動工具も学校には一切無くなっている。危ないことは避けているのだろう。

●事務局

委員のおっしゃるように、我々も要望があれば職員が付いて山に登っているが、何しろ限られた人数なので、「明日もあさっても」とは、なかなかできない。お金の問題などクリアしなければならぬ問題もあるが、そのあたりは、ぜひ美瑛町内の方に外部指導員のようなかたちで、人材を養成できないか。町にも人材リストの話があるが、登山の方はいらっしゃらない。そのあたりを一緒に養成できると、例えば、外国人の観光客も増えているので、そのガイドをするということにもつながるのではないかと考えている。そのような人材発掘を一緒にできればと思う。町内にいる山岳会のような方が 10 人ぐら

いいれば、たぶん学校でもやってみたいと考えるところは増えそうな気はしている。

□委員

人材バンクは公募の登録制。山岳会とは名前は出ていない団体で、人材バンクに登録はしていないが、指導はできる人はいる。相談があれば指導はすると話している。山岳会も、人数は分からないが、役場関係が多い。管理課長や、大雪の職員に派遣で来ていた者などは、装備品も自前で揃えてプライベートで山に行っている。消防でも、山に行っている人はいるが、何か緊急事態があれば出て行かなければならないので、なかなか、そこは難しいという話はしている。

●事務局

恐らく、登山のスキルは非常に高い人がいらっしやるのだろう。子供を大勢連れて行くときの研修の時に、こんなことに気を付けてほしいなどの話をしていただければ、我々にとっても非常に心強い。そのあたりは、検討して是非実現できるようにしていただきたい。

□山岳会の会長は、今は観光協会の会長なので、そのあたりは直接話しても問題ないと思う。研修を行っているとは聞かないが、定期的に人は集まっているようだ。

□事故などがあつた場合は、いち早く現場に行っているようだ。この青少年交流の家は、やはり山登り。関連している訳だから、素人でも山が好きだという人たちに付いていけるぐらいの、いっぺんに指導者にならなくても、徐々にになれるようなこの事業はいいことだと思う。学校でしなくなってきたので、登りたい人はたくさんいるのだから、広がりやすいのではないか。特に親子で。

○それでは、次に「ワイルドライフキャンプ」について、お願いします。

●事務局

この事業は長期の自然体験や宿泊体験などの体験活動をとおして、子供たちの生活習慣の定着、コミュニケーション能力、自己肯定感の向上などの社会を生き抜く力を育成すること、地域の教育資源を生かして子供たちの体験活動に関わっていただくことを通して地域の教育力を向上させていくことを目指して、今年で4年目の事業になる。今年度のプログラムの特徴としては大きく二つある。まず、一つ目は農業や林業などの職業体験を入れたこと。学校の授業や地域の事業などで収穫体験などを経験する子は多いと思うが、今回は敢えて普通の農作業を行わせていただくように頼んだ。例えば、それが物置の片付けや雑草取りなどであっても、農家の仕事の大変さを知ることには価値があると考えた。実際には、ハウス内でのトマトの脇芽を取るという地道な作業を低学年と高学

年に分かれて行った。子供たちは専用のはさみを使い、3時間ほどの作業を黙々と行った。また、地元の森林組合では、薪割りや木材の皮むきなどを行い、ここでも仕事の大変さと共に、「うまくできた」「頑張れた」という達成感や満足感を得る活動となった。このように職業体験をとおして、働く大人の姿に触れることで、子供たちが働くことの意義や将来を考えるきっかけとなったようだ。それが生きる力にもつながると考えている。プログラムの特徴の二つ目としては、食事作りにおける主体性を大事にした。具体的には、昨年までは、食材やメニューが用意された状態で炊事を行っていたが、今回は1週間分のメニュー作りや買い物まで行わせた。買い物には路線バスを使い、予算の中で買い物をするという苦勞をした子供たちは、グループとしての結束を強め、炊事活動を重ねるごとに手際や作業分担をうまく進めるようになっていった。長年、このようなキャンプ事業を見てきた次長からも、「こんなにしっかり食べるキャンプは初めて」と言うほど、食べ残しがほとんどなかった。事後の調査では、「ママは毎日ご飯を作るのは大変なんだね」と言って、手伝いをするようになったなど、今回のキャンプで食に対する意識を高めた子が非常に多かったようだ。その他、登山やそれに向けたハイキングなどを昨年はやっていたが、今年はそのような時間を農業や林業の体験を入れた関係で色々な活動を展開することができた。このように参加者の子供たちは、長期キャンプの様々な体験活動をとおして、自信を付け、日常生活でも前向きな姿を見せるなどの成果を挙げたが、もう一方で、子供たちに体験活動を提供した農家や農協の方、役場職員の方、森林組合の方などの多くの方々が、「子供たちにもっと良い活動を提供したい」「もっと仕事のことを知ってもらいたい」という思いをもち、体験活動の意義や重要性を実感していただけたことで、「地域の教育力向上」というこの事業のもう一つの目標を達成することができたと考えている。尚、明日はこの事業の企画委員会を行い、今回の成果や課題について、御意見をいただいて、来年度以降の事業に向けていきたいと考えている。

○部会長

8日間というのは、意味があるのだと分かった。

●事務局

補足だが、今回、中学生のハーフボランティアという子たちが二人いた。これは、昨年までにこの事業に参加した経験のある子で、一般の参加者と別メニューと言うか、他の参加者のお世話もしながら、スタッフのお手伝いもするという体験を提供し、本人や保護者からも非常にいい経験になったと聞いている。

●事務局

これも、補足だが、この事業に当たっては美瑛町と上富良野町が進めているジオパークの取組と連動して、ジオパークで使えるようなソフトの開発やプログラムの開発を役場

の総務課職員と連携して取り組んでいる。また、炊事の活動をたくさん行っているが、今は炊事場が無いので、グラウンドの横にある野外活動棟の横に、規模は大きくはないが炊事場を作ることになった。恐らく、来年夏休み明けごろに、学級2クラスが賄えるぐらいの炊事施設ができる予定になっている。

○部会長

それでは、明日、企画委員会があるということなので、あとはそちらに委ねるということにしたい。次に「体験の風キャンプ in ゆーすぴあ仁木編」、お願いします。

●事務局

道内の児童養護施設を対象としたキャンプで、今年度は2施設と連携をして実施。一つは美深町にある「美深育成園」、もう一つは仁木町にある「桜が丘学園」。趣旨としては、子供の貧困対策に関わる大綱を踏まえて、振興機構の基金を活用し、道内の児童養護施設に募集をして実施している。昨年も同じように実施しているが、今年度は仁木編の方は、本来は2泊3日の事業であったが、台風の影響で予定通りに帰ることができなかつたために、1泊追加して3泊4日の事業になった。事業の中身は、旭山動物園、富良野自然塾の協力を得て、平成30年度の利用者拡大を目指し、互いの施設の利を生かした共同でプログラムを利用者に提供していくという方策で進めており、その予備プログラムとして今回の事業を取り入れて実施してきた。具体的には、動物園に行く前に飼育員に来ていただいて、レクチャーを受けた。持ってきていただいた動物の羽を触ったり、骨の標本を観察したりして、動物園では動物の様子を見ながら説明を加えていただくというプログラムを提供した。富良野自然塾では、ゴルフ場を活用した自然体験プログラムを予定していたが、残念ながら台風の影響で実施はできなかった。参加した子供たちや、スタッフへの事後アンケートでは、「かなり満足した」「子供たちにいい体験をさせられた」などの声をいただいている。

○部会長

募集定員が62名というのは、どういうことか。

●事務局

前年に、児童養護施設に実際にどのくらい参加できるかの予備調査を行った段階では中学生も一緒に来るということだったが、今年に入って中学生が別のプログラムを組んでいるということで、小学生だけの参加となり、スタッフを合わせて33名の参加となった。

○部会長

充足率の事を考えると、ここはこれでいいのだろうか。

●事務局

ここは、充足率の計算に入れていない。それと、次年度の事業の方針が内々には出ており、貧困対策や体験の格差是正がかなり大きなテーマになっている。次年度については3事業を実施するようという指示が来ている。局の社会教育指導班とも旭川市内の児童養護施設だけではなく、例えば交通遺児の母子の会など、幅広く連携先を探して、テーマに合う対象を広げていかなければならないと考えている。プログラムの中身自体は、相手先の希望に応じて作っていくもので、現状は以上のようになっている。

○部会長

次に、「ダンボールで作っちゃおう！」について、お願いします。

●事務局

施設の利用や体験活動の普及を目指して、追加で行われた事業。遊びを中心とした幼児期のプログラム「遊んで身に着く 36 の基本的な動き」を活用したダンボールの制作物を作って遊ぶというプログラム。参加実績は募集 30 名に対して、参加が 29 名、家族数では 8 家族の参加。内訳については資料に書いてある通り。内容は、段ボールを大量に使って制作物を作り、遊んで、手直しができそうなところを直す。最後に作品発表、交流という流れで事業を行っている。制作した遊具には、動きのイメージを示したロゴのカード、例えば「ひく」「とぶ」「なげる」「もつ」などのカードをはり、その遊具で要求される動きを考えながら製作するという活動になった。その結果、制作にあたり、例えば「のぼる」という動きのために、段々をつけるなどの工夫を考えて製作していた。また、子供も大人も交流し、充実した活動になったという評価をいただいている。また、段ボールの制作物は「ゆーすフェスタ」というお祭りに展示し、今回の参加者にお祭りに参加していただきたいという PR の役割も果たした。

●事務局

補足になるが、「海の子山を知る」という事業、「大地と宇宙の観察会」「ダンボールで作っちゃおう！」などは、利用者数が目標に達するように臨時で追加した事業。それぞれに事業の趣旨はあるが、所の別のねらいとしては、若手職員が事業のノウハウを学ぶ事業としている。そのような訳で、プログラムの完成度は、まだまだの部分もある。「海の子山を知る」は 8 名しか集まっていない。これは、対象を留萌市と小平市に絞っている。日本海側の子供たちは、なかなかこちらの施設を使いたくても使えないような条件にあるので、そのような子供たちに、この施設の良さを知ってもらうような機会を作ってみてはどうかということで実施した。距離的に遠いということで、人数も少なくなっているが、大雪を使っただけではない市町村をターゲットに、今後も同じような取組を

したいと考えている。

○部会長

色々と手を変え、品を変え、まずはやってみるとよいのではないか。

●事務局

このあとの「青少年スキルアップセミナー」「教員免許状更新講習」については、資料を見ていただき、説明などについては、割愛させていただきたい。これらについては、毎年実施していかなければならない事業なので、もし何かお気づきの点などがあれば、その都度、御意見をいただきたい。

○部会長

それでは、一つ目の議題である 11 月までの事業については終わりたい。議題の二つ目の 11 月以降の事業については要点のみの説明でお願いしたい。

【議題 3 ついて】

●事務局

「白金カップ・クロスカントリースキー記録会」「NEAL リーダー養成事業」については、昨年度までも引き続き行っており、今年度も準備を進めている。何かあれば、御意見をいただきたい。全体会でもお配りした資料の「幼児教育フォーラム」については、担当者から説明申し上げる。

●事務局

理事長が推進している幼児教育について、大雪としても幼児を取り込みながら施設を運営していくということが、今後求められると考えられる。そのために、フォーラムを行って、きっかけ作りとして進めていく事業。来年度から、新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針が実施になることに向けて、幼稚園や保育所の先生方、保護者にも学んでいただくきっかけ作りとしている。内容としては、内閣府や文科省の方々をお呼びしてパネルディスカッションを行うが、午後は遊びのようなブースを 5 コースほど設けて、分科会で学んでいただき、大雪でできることを体験していただく流れ。幼児教育については、子供たちの主体的な遊びを通して、体験を積み、学びを積むということが求められているので、そのためには環境整備が重要。所の中でも、子供たちが自由に遊べる環境を整備していくために、恵庭幼稚園の園庭を参考にしていきたいと考えているので、その動画を見ていただきたい。

(動画：園庭に泳ぐ魚、自分たちで野菜を収穫、切る、食べるなどの園児の様子)

●事務局

この幼稚園では、この期間だけ、重機で園庭を掘ってプールを作っている。周りは住宅地。魚が泳ぐプールに子供が飛び込んでいる。危険を恐れる場合があるが、安全を確保したフィールドで行っている。このようなダイナミックな活動ができる環境が、子供には大切だということを広めていく必要があるのではないかと考えている。フォーラムを、そのきっかけの事業と考えているので、委員の皆様もお時間があれば、ぜひ来ていただいて、ご覧いただきたい。

○部会長

幼稚園も、今は特色がないと、子供が集まらない時代。だんだん、幼稚園の数は減っている。そのような中で、打てば響くという職員の方はたくさんいるのではないかと。以上で、12月から後半の事業について、説明をしていただいた。次は、自己点検評価について説明をお願いしたい。

【議題4について】

●事務局

今年度、部会の目標を掲げた実施項目について、どれだけ目標に近付いているか、効果的な対策を講じ、結果が出ているかを現時点で中間報告として採点したもの。先ほどの事業報告に基づいて採点したもの。採点については、企画指導専門職、事業担当者を紹介して事業推進室長が最終的に判断し、その後、次長、所長が目を通して、この評価となっている。事業が継続中の自然体験活動指導者養成事業（NEAL）については、評価も継続中。その他の項目については、全て「A」とさせていただいた。根拠資料を参照されたい。お気づきの点があれば、御指導いただきたい。

○部会長

この自己点検評価とは、この部会としての評価であるということ。施設の方では、このように作っているが、主体は部会にある。そのようなところから、御意見をいただきたい。今は、成果目標が教育でありながら数値化しなければならないというところは、大変。

●事務局

今は中間地点のものなので、最終的には第3回の部会の中で、正式に評価をいただくこ

とになる。この成果目標がこれでいいのかということも、今後さらに検討していかなければならない。ただ、やりましたという評価ではなく、どんな成果や効果があったのか、所としての考え方もあり、委員の皆様にご意見を伺っていただき、例えば数字でなく、定性的なものでもよいのではないかと考えている。ただ、利用者数の目標に届いていないのに、自己評価だけが高いというのは、自己満足になってしまいかねない。目標の数字を達成できていないのは、どこかに課題や問題があるはず。そこが明らかになるのが評価だと考えるので、もう少し時間をいただいて整理し、3回目の部会に御報告したい。

○部会長

最後に、事務局から何かあれば、お願いしたい。

【議題5について】

●事務局

いろいろと御意見をいただいた中で、ものづくり等、我々も考えていかなければならない。他に、まだ5,000人の利用者確保しなければならない。厳しいが、何としても50パーセントという稼働率は確保したい。少しでも、アイデアがあれば、お伺いしたい。

○部会長

今までの話にあったように、稼働率の達成には日帰りではなく、宿泊の利用者が大事。泊を伴う事業で、もう少し簡便に人が集まる事業のアイデアが何かあればと思う。

□委員

やはり、人を集めることが大事。今の状態のかたちを進めるのも大変だと思う。自分は上富良野町で水田を作った。旭川の施設にいて、支援の必要な子の親子を連れてきて、2～3年間無償で行った。子供たちが収穫したものは全て施設に持ち帰って使ってもらった。登録が必要だったことを指摘されたが、その内容を伝えると、許してもらえた。やはり、このように普段できないことをさせてあげると、子供は喜ぶ。親にもとても感謝していただいた。このようなことにも目を向けて、うまくいけば続けていけることだと思う。

○部会長

今は、所バスの利用の制限などはあるのか。

●事務局

運用のルールはあるが、可能な限り対応はしており、旭川市内ぐらいまでは送迎は行っ

ている。部会長にお聞きしたいのだが、旭川市内の保育所や幼稚園で、来年小学校1年生になる親子を対象に、小学校の先生や校長先生を招いて、1日入学のような1泊入学のようなことを保護者に呼び掛けたとすると、どんな反応になりそうか。

○部会長

保育園よりは、幼稚園の方が乗ってくるのではないか。保育園は、保護者の両方が働いているため、土日の事業には、あまり乗ってこないかもしれない。土日は、保護者にとっては貴重なのではないか。

●事務局

父親と子供を対象とするのはどうか。母親は家で休んでいただくことにして。

○部会長

それは、喜ばれるかもしれない。

□委員

今、言われたように、保育所では無理だろう。両親が働いているのが、保育所なので。ライオンズクラブでノロック号を提供したことがあるが、あれは青葉幼稚園しか、協力をいただけなかった。保育所では無理だった。

●事務局

他にも、何かいい情報があれば、適宜寄せていただければ、実現していきたいので、引き続き、よろしく願いしたい。

○部会長

予定していた内容はこれで終わるが、発言をされていない委員もいらっしゃるので、最後に御感想やアイデアなどでも、何か一言、お願いしたい。

□委員

昨年、「ワイルドライフキャンプ」に関わらせていただいた。今はどうしても、何でも過保護にしてしまう傾向があるので、そこから出ていく方法を取らないと、どうしてもちこまった内容になってしまう。そのようなことも考えていくことが必要ではないか。

□委員

日ごろから、公民館として関わらせていただき、交流の家の所長からも、何か連携がで

きないかと言われている。今は、来年の事業をこれから考える時。同じ美瑛にあるので、自分が担当だった時には、よく交流の家と一緒に事業をやっていた。先日は少年団のリーダー研修をやったが、その時は交流の家ではなく、公民館で完結してしまった。以前は、交流の家で、職員からの講義も受けながら実施していた。今後、事業を充実しながらやっていきたいが、内部でも同じ日に教育委員会、公民館、図書館の事業を行ってしまい、子供の取り合いのようなことになってしまったことがあった。もう少し、効率よく、子供や親のために、交流の家とも調整をしながら、関わることがあれば、連携して行っていきたい。

●事務局

日程調整の会のようなものを持たないか。一度、顔を合わせておけばと思う。ぜひ、御相談させていただきたい。

□委員

人集めの部分は大変だと思う。これからやる幼児フォーラムなどの事業については、教育局としてもチラシの配布などを協力したい。

●事務局

(閉会宣言)